

キャリア教育の視点で特別活動をとらえる

—社会へ参画し一人一人のキャリア形成と自己実現をめざす—

勝 田 み な

摘要：学習指導要領特別活動の学級活動の内容に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」が新設された。個々の児童・生徒の将来に向けた自己実現にかかわる内容であり、一人一人の主体的な意思決定に基づく実践にまでつなげることをねらいとしている。特別活動を要として、学校の教育全体を通してキャリア教育を適切に行うことが示されたのである¹⁾。

キャリア教育の要としての役割を担った特別活動においては、意識的に社会における自己の立場に応じた役割を果たせるようにキャリア教育を進め、より良い状態を形成する能力を身に付けていく必要がある。社会における自己の立場に応じた役割を果たしていこうとするには、社会に参画し一人一人のキャリア形成と自己実現を図ろうとする態度を養う必要があることから、自分らしい生き方について考えを深めていく。具体的に実践を提示して、キャリア教育の視点から特別活動の充実を果たす点について一考する。

キーワード：特別活動 キャリア教育 社会参画 キャリア形成 自己実現

1. はじめに

小学校においては、令和2年度(2020)から学習指導要領がいよいよ完全実施になる。学習指導要領(小学校と中学校)の総則の中で、「児童・生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」²⁾と明記された。今回、総則に規定された理由として、キャリア教育については、その理念が各学校に浸透してきている一方で、① これまで学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場が曖昧にされてしまっているのではないかと、② 狭義の意味での「進路指導」との混同により、特に特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校では、体系的に

行われてこなかったのではないかと、③ 将来の「夢」を描くことばかりに力点が置かれ「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかとといった指摘があったから³⁾である。こうした課題を踏まえて、今回「キャリア教育の充実」を学習指導要領総則において規定したのである。

キャリア教育の要としての役割を担った特別活動においては、意識的に社会における自己の立場に応じた役割を果たせるようにキャリア教育を進め、より良い状態を形成する能力を身に付けていく必要がある。社会において、自分の行動や考え方を変容させていくことができるためには、その都度、自分にとって何が重要なのか、その意味は何なのかを考えて判断していくことが大切になる。また、社会における自己の立場に応じた役割を果たしていこうとするには、社会に参画し一人一人のキャリア形成と自己実現を図ろうとする態度を養う必要があることから、自分らしい生き方について考えを深めていく。さらに、キャリア教育の視点から特別活動の充実を果たす点について一考する。

2. 特別活動とは

特別活動は、小学校の場合は、学級活動、児童会活動、クラブ活動及び学校行事の四つの内容で構成され、中学校の場合は、学級活動、生徒会活動及び学校行事の三つの内容で構成されている⁴⁾。児童生徒が学校生活を送るうえで、協働的な活動や違うものを認めたり受け入れたりしていく活動において、集団として機能するための基盤になっている。言い換えれば、特別活動は、児童生徒にとって、学校生活を送るうえでの基盤になる力や、社会で生きて働く力を育む大切な領域である⁵⁾。学校での教育が、まさに自立のための教育と考えられるのであれば、社会的自立を具体的に育てていく教育はキャリア教育そのものである。鈴木は、「自分が他者とのかわりの中で今どう生きるかが特別活動の中で体験すべきものであるなら、その延長線上に社会に参画する仕方をどうするかを考えさせる教育がキャリア教育の役割であろう」⁶⁾と、特別活動とキャリア教育の関連性を述べている。長谷川は、「キャリア教育の必要性の高まるなかで学校教育に求められている課題を解決するためにも、特別活動は一定の役割を担うことが必要であると考えられる」⁷⁾と述べており、特に学校行事では、ルールやマナーを守ることや人間形成や自分の将来についての生き方を学ぶ内容として、キャリア教育の視点から重要な役割を担うことになる。

児童生徒が、学級に所属しているという気持ちや友だち同士の連帯感によって、各学級・各学校の特色につながり、特別活動の更なる充実が期待されている。鈴木は、「人が人として社会でその存在を受容されて生きて行くためには、自己を知り、他者を受け入れ、集団をより良い方向へ進める意欲や資質が必要である。そういう資質を集団の体験の中で育てる場こそが、学級、生徒会、学校行事などを指導の場とする特別活動の領域である。」⁸⁾と述べており、学校では知識だけを詰め込む場ではなく、社会で自立する力を育てるために重要な役割を果たしてきたのが特別活動になるといえよう。

(1) 特別活動の基本的な性格

学級や学校のさまざまな集団や人間関係の中で、特別活動で身に付けた資質・能力が生かされる場面は、社会に出た後になる。とりわけ、特別活動は、全教育活動を通して行われる人間形成の統合的な時間として教育課程に位置付けられ、海外からも高く評価されてきたところである。この人間形成を実践的に統合する全人教育としての役割が、特別活動の基本的な性格である⁹⁾。この性格を鑑みて児童生徒のこれからの将来、複雑で変化の激しい社会において、社会的・職業的に自立して生きるための力を育成することが大切になってくる。そのためには、主体的に社会へ参画することが求められており、自己実現にかかわる発達の特質を踏まえて指導をする必要がある。つまり、児童生徒や学級・学校の実態に応じた指導を行うということである。

(2) 学級活動の内容

特別活動の構成の一つである学級活動の目標は、「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」¹⁰⁾である。小学校、中学校ともに共通の目標を掲げ、小・中学校9年間の学習を積み重ねていくことになる。

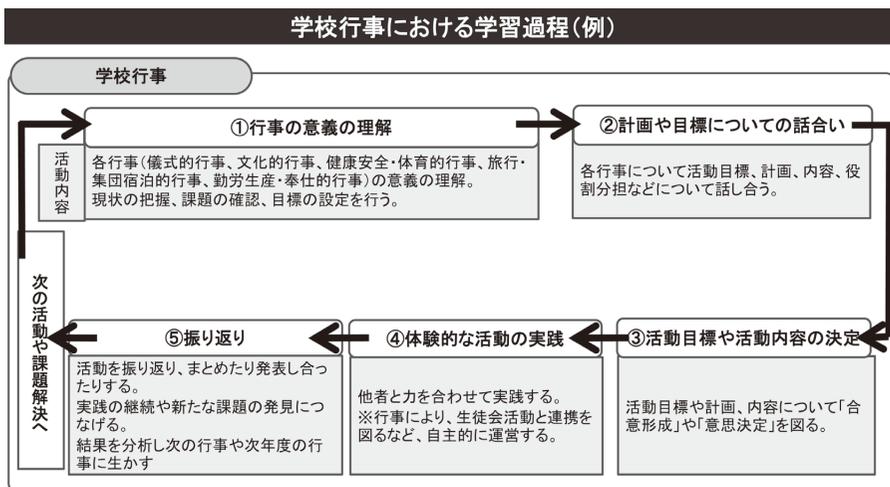
学級活動の内容は、(1) 学級や学校における生活づくりへの参画、(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全、(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現、であり学級活動において育成することをめざす資質・能力は、問題の発見・確認、解決方法等の話し合い、解決方法の決定、決めたことの実践、振り返りといった基本的な学習過程の中で育まれるものである¹¹⁾。学級活動(3)に関する内容のひとつに、「社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成」がある。この内容は、勤労観・職業観を育み、集団や社会の形成者として、社会生活におけるルールやマナーについて考え、日常の生活や自己の在り方を主体的に改善しようとしたり、将来を思い描き、自分にふさわしい生き方や職業を主体的に考え、選択しようとしたりすることができるようにするものである。今日の我が国の若者の勤労観・職業観の醸成にかかわる指導は、重要な役割を担うものと考え¹²⁾。

学級活動(3)の「キャリア形成」とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくための働きかけ、その連なりや積み重ねを意味する¹³⁾。一人一人が主体的に意思決定して実践することができるようになるためにも、キャリア教育を適切に行うことが示されたのである。新たな教育内容を考えるのではなく、現在、行っている教育活動をキャリア教育の視点から見直していくことが大切である。具体的なキャリア教育の視点は、日常生活などの問題を取り上げ、教師が意図的、計画的に指導することによって、一人一人の考えを深め、実践につなげることになり、児童生徒の現在から将来の生き方を考える基盤になるものである。

(3) 学校行事

学校行事の目標は、「全校または学年の生徒で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属間や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」¹⁴⁾である。学校行事の特質や、児童生徒の実態に応じて自主的、実践的な活動を助けることが大切になる。

内容としては、(1) 儀式的行事、(2) 文化的行事、(3) 健康安全・体育的行事、(4) 旅行・集団宿泊的行事、(5) 勤労生産・奉仕的行事であり、それぞれの活動を行う上で必要になることを理解し、主体的に考えて実践できるように指導していく必要がある¹⁵⁾。各行事は、活動の上で必要なものについては理解し、自分の目標を持ち活動に参加していけるようにする。



(中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 p94)

学校行事の活動は、学校生活の節目を付けることになり、生き生きとした生活を実現することとなる。また、特別活動は、学校や地域社会のために役立つことや働くことの意義を理解することから、社会参画への意欲を高めて自ら進んで活動できるようにする態度を養うことが必要になる。各学校の特色を生かした学校行事の実施のためには、全教職員が協力し、さらには保護者や地域の人々との連携を行っていくことも重要である。具体的な活動の過程は上記のとおりである¹⁶⁾。

3. キャリア教育の推進

キャリア教育が必要となった背景には、社会環境の変化や若者の社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れなど、いくつかの課題が生じたことにもよると考えられた。また、児童生徒の成長や発達においても、身体的な発達と精神的な自立のバランスが取りにくくなり、体験が欠如する傾向もみられている。

キャリア教育の視点で特別活動をとらえる
—社会へ参画し一人一人のキャリア形成と自己実現をめざす—

進路選択や将来計画がままならない状態で、進学や就職する若者が増えており、社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる基礎的・汎用的能力の育成¹⁷⁾を図っていくことが必要になった。

(1) キャリア教育の推進

キャリア教育という用語が登場し、小学校段階から発達の段階に応じてキャリア教育を実施する必要が出た。学校ごとに目的を設定し教育課程に位置付けて計画的に行う必要があったが、教育現場において勤労観や職業観の育成に焦点が絞られているという状況が続き、中学校では職場体験学習だけが、キャリア教育であるかのように解釈されている時期もあった。近年は、キャリア教育への関心が高まっており、小学校からキャリア教育の本来の意義が理解されつつあり、取り組みが進められてきた。

児童生徒が自分自身に自信をもち、物事に進んで取り組んでいける自分をつくるという意味でも、将来を担う児童生徒が社会に参画していく活動を促していくことにおいても、キャリア教育を進める必要がある。児童生徒が将来において社会に関心を持ち、自分の意思を決定したりする態度や能力の育成は重要な課題といえる。キャリア教育の推進だけでなく、学校教育の充実を図るためにも、各学校の組織を見直し推進体制を整えることが必要になってくる。これは、教職員の共通理解のもとでキャリア教育の全体計画を通じて、基礎的・汎用的能力を育成することである。ここでは、例として愛知県の取り組みを、キャリア教育推進の手引「小中学校9年間を通じたキャリア教育」より一部抜粋して紹介する¹⁸⁾。

<4つの身に付けさせたい能力>

「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」のことである。

- ① 人間関係形成・社会形成能力：あいさつのように基本的な生活習慣として他者との間で日常的に交わされるやりとりから対人場面での問題解決といった、相手の立場を踏まえながらも自己主張をするような機会まで、様々な対人経験を通じて形成される。
- ② 自己理解・自己管理能力：学習活動をはじめとした諸活動をできるだけ豊富に経験させることが、自らの能力に対する認識や、活動に対する興味・関心を高め、その結果として深い自己理解をもたらすことへとつながる。
- ③ 課題対応能力：基本的な生活習慣の形成（例えば、授業の準備、係活動など）、その基盤的能力が育まれる。
- ④ キャリアプランニング能力：様々な社会人と交流し、自ら職場体験をする取り組みを企画することにより、キャリアプランニング能力の基盤を育むことが期待できる。

<愛知県らしさを生かす>

- ① 身近に存在する多様な産業を生かす：それぞれの産業を支える大人がいて、はじめて自分た

ちの生活が成り立っているという実感をもたせる。

- ② 根付いている伝統文化を生かす：伝統文化は何代にも渡って受け継がれているものであり、身近に感じることは、未来につなげていくことを意識しやすい環境である。
- ③ これまでのキャリア教育の実績を生かす：「キャリア教育生き方メッセージ集（DVD）」を視聴し、事業主の思いが詰まったDVDを大いに活用する。

以上の愛知県の取り組みは、小・中学校でどのような教育活動を、保護者や地域の方々、教師以外の方にも知ってもらう機会として、愛知県教育委員会のホームページにもアップしている。

(2) 中核的な役割を担う特別活動

キャリア教育は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」¹⁹⁾のことである。人は、自分をとりまく身近な人や集団などのかかわりの中で、共通点や相違点の関係を見い出しながら繰り返したり積み重ねたりして人や社会にかかわることになり、そのかかわり方が自分らしい生き方となっていくのだろう。近年、キャリア教育に対する社会的な関心が強くなってきているが、関心が強くなった背景には、学校から社会への移行をめぐる課題、子どもたちの生活・意識の変容などから、学校教育に求められる「生きる力」の育成が強化されたからであり、そのためにもキャリア教育の推進を行うことになったのである。このようにキャリア教育を進めるうえでは、学校教育における「特別活動」が重要になり、教育課程を編成する根幹に値する位置にあるといえる。二川は、「キャリア教育の目的と位置づけを教職員がしっかりと理解して活動を行う必要がある」²⁰⁾と述べており、具体的な知識・技能を指導していくためには、当然のことと言えよう。

学習指導要領では、キャリア教育の要となる特別活動の学級活動の内容に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」²¹⁾を新設した。個々の児童・生徒の将来に向けた自己実現にかかわる内容であり、一人一人の主體的な意思決定に基づく実践にまでつなげることをねらいとしている。特別活動を要として、学校の教育全体を通してキャリア教育を適切に行うことが示されたのである。高橋は、「小学校の学級活動に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」を設けキャリア教育の視点からの小・中・高等学校のつながりが明確になるようにしたという記述は、まさにここに具体化されていると言えよう」²²⁾と述べており、より広い視野でキャリア教育を取り入れようとしていることがわかる。また、将来に生きる意欲の形成を意識し、基礎的・汎用的能力を背景にして育成することが必要である。

特別活動の指導に当たっての留意点としては、2点踏まえる。① キャリア教育が学校教育全体を通して行うものであるという前提のもと、これからの学びや自己の生き方を見通し、これまでの活動を振り返るなど、教育活動全体の取り組みを自己の将来や社会づくりにつなげていくための役割を果たすということ、② キャリア教育の視点からの小・中・高等学校へのつながりが明確になるよう整理することによって設けられたということを考慮しながら、教育活動全体の中で基礎的・汎用的能力を育むこと²³⁾が挙げられ、個に応じた指導、支援、相談等との関連を図り、

教育活動全体を通してキャリア教育を進めることが大切になってくる。

総則第4の1の(3)に「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」²⁴⁾とあるように、キャリア教育は学校の教育活動全体を通じて取り組むべきものである。キャリア教育を効果的に進めていくためには、校長のリーダーシップのもと、校内の組織体制を整備し、学年や学校全体の教師が共通の認識に立って指導計画の作成に当たるなど、それぞれの役割・立場において協力して指導に当たることが重要である。すなわち、キャリア教育の要としての役割を担うこととは、教育活動全体の取り組みを自己の将来や社会にづくりにつなげていくための役割を果たすことである。

4. 特別活動の実際 -A 中学校の場合-

A 中学校は B 国 C 中学校と海外交流を行っており、隔年で B 国 C 中学校訪問団が来校するにあたり、特別活動の学校行事として B 国 C 中学校訪問団との交流活動に取り組んでいる。しかしながら教育課程は、各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動で編成されているため、それぞれ関連を図ることが必要であり、各教科等で進めていった。訪問団が来校する前の年には、B 国への海外研修を、夏休み期間を利用して出かけた。ホームステイでお世話になった先生と生徒たちを、今度は A 中学校全員の生徒が交流活動を行った。15 年近くこの交流活動が続いている。

(1) キャリア教育を基軸にした特別活動

A 中学校では、「豊かで充実した学校生活を体験させるために、生徒一人一人が集団の一員としての自覚をもち、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度の育成をめざすこと」を基本方針としている。この点を踏まえて、C 中学校訪問団との交流活動をキャリア教育の視点で特別活動を捉えてみることにした。なお、西岡の論文²⁵⁾を参考にしてキャリア教育を考えてみたい。

① 学校行事におけるキャリア教育の推進

C 中学校との交流活動は、学校が計画して実施するものであるが、生徒が積極的に協力して行うことが、充実した活動につながる。また、特別活動が果たすべき役割として、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点に整理したが、その中で、「社会参画」に着目して、特に集団における活動にかかわることが、地域社会に対する参画、持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながる点を挙げた。個人が集団へ関与することによって資質・能力が育まれていくものである²⁶⁾。

キャリア教育の推進を図るうえで、学校行事を展開する上での留意点として、どうしても一部の生徒だけが活動する場面が出てしまう。しかしそれは、学校行事の実現に向けてそれぞれの役割を果たすことであるため、役割がないからと言って活動に参加しないわけではない。各自がそれぞれどこまでかかわれるのか等、活動内容を創意工夫していくところが大切になる。この点は、

他者と協力し合いながら、自らの能力や適性を生かして仕事や役割を担うことが社会づくりにつながる²⁷⁾など、キャリア教育の目標として掲げても効果的な、自己肯定感や自己有用感などについて理解できるようにすることも関連して考えることが可能である。

ここでは生徒の役割によって、さらに留意する点が異なるのでそれぞれ自分の立場に立ってキャリア教育に取り組む際の目指す姿を挙げてみた。

B 国 C 中学校訪問団との交流活動 —キャリア教育に取り組む生徒の姿—

① 生徒会役員の姿

- ・ C 中学校「歓迎会」、「体育祭」、「送別会」では、生徒会役員が計画立案、進行を行った。
- ・それぞれの活動における取り組み分担を、各委員会に割りふった。
- ・自分の役割を確認して責任をもって取り組んだ。
- ・活動運営において、達成した喜びを感じて次への意欲につなげた。
- ・ふりかえりを行うとともに、それぞれの活動についてまとめた。

② 学級でのクラスメートの姿

- ・授業等でグループ活動を行うときは、楽しめるように対応した。
- ・協力的な態度で活動し、優しさをもち、お互いに認め合うような気持ちをもった。
- ・自分から進んでゲストと交流し、相手の気持ちを察しながらも、自分にできることや、やってみたいことを考えた。

③ ゲストを受け入れたホストファミリーの姿

- ・家族の一員として、相手を尊重し人間関係を円滑に進める。
- ・日本の生活スタイルに、少しでもなじめるように工夫する。
- ・食事では食べられないものを聞いたり、日本食を勧めたりして共有しながら、取り組んでいく。
- ・日本での思い出をどのように作ってあげるとよいかなど課題解決のため、行動する。

中学校におけるキャリア教育は、必要な資質・能力の育成をめざし、学校全体で体系的に推進することが大切である。また、このような体験活動を充実させることは、将来の社会生活・職業生活、さらには自分の生き方や進路にまで考えられるようになり、キャリア教育と特別活動を関連付けるなど、啓発的に活動を行っていくことは、自己のキャリア形成をする上で、有意義な学習活動になっていくと考える。

(2) キャリア教育の推進・充実につながる特別活動における方法

基礎的・汎用的能力育成の観点に立つことは、具体的に自分の果たす役割を理解して、ゲストをはじめお互いの良さを認め合う人間関係作りを構築していくことになり、充実した学級活動・学校行事が展開されていく。C中学校の来校にあたり学校だけではなく、ホームステイ先の家庭

キャリア教育の視点で特別活動をとらえる
—社会へ参画し一人一人のキャリア形成と自己実現をめざす—

からの協力がなければ成り立たない特別活動である。まずは、自分の役割を理解してお互いの良さを認め合う人間関係作りから活動が始まる。C中学校の来校にあたり、学校行事を中心とした基礎的・汎用的能力育成の観点に立った特別活動は、キャリア教育の充実した内容であった。以下は、4つの能力で示してみたが、これは社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力の育成をめざしている。

a) 人間関係形成・社会形成能力

- ・礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
- ・他の人々に対し思いやりの心を持つ。
- ・他者の意見を尊重しつつ自分の意見について適切に表現する。
- ・外国語活動を通じて、コミュニケーションを図ることの楽しさや大切さ、さらには多様なものの見方や考え方があることに気付く。
- ・話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合う。

b) 自己理解・自己管理能力

- ・望ましい生活習慣を身に付ける。
- ・節度を守り節制に心がけ調和のある生活をする。
- ・より高い目標を目指し、夢と希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
- ・自分の個性を生かして活動することができる。

c) 課題対応能力

- ・問題の解決に向けて見通しをもって計画する。
- ・人との交流を通じて情報を集め整理する。
- ・身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要なことがらを思い出す。
- ・聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり表現に生かしたりする。

d) キャリアプランニング能力

- ・自分の個性を見つめながら将来の生き方について考える。
- ・各教科の学習が、自分の将来の生き方と関連していることに気付く。

(3) 結果と考察

特別活動におけるキャリア教育に関する活動では、学級活動と学校行事を挙げることができる。それは、学級活動に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」を設けたことにより、キャリア教育を強く意識していると言えるからである。また、小学校から中学校・高等学校との連続性という意味においても必要なことである。

特別活動の内容構成には生徒会活動も構成されている。生徒会長をはじめとする生徒会役員が

中心になり、C 中学校の来校にあたり歓迎会と送別会を計画・実行した。国際交流では、まずはコミュニケーションをどのようにとるのか、何を課題としどのようなテーマで全校生徒がゲストを迎えるのか、そして送るのかを考えた。生徒会役員は、どのように係分担を他の委員会に依頼し課題を解決するのかは、体験活動前の事前準備が重要になってくる。いわゆるカリキュラム・マネジメントの視点に立ち、相互の関連を図った自発的、自治的な活動の相違ある展開は、効果的な指導を可能にするばかりではなく、生徒個々の深い学びを実現することになり、極めて受容な活動と言える²⁸⁾。お互いに協力しながらゲストと共に与えられた時間を有効に活用するために、課題解決すなわち学校行事の成功に至るまでの道筋を理解して実行に移していく。教員は、キャリア教育の視点をもって指導にあたり、生徒のそれぞれの役割や立場、状況などを把握して、他者と協力して社会に参画していけるように指導を行うことである。

C 中学校が来校している期間は短い、一つ一つの行事や活動が終了したらすぐにふりかえりを行い、次の活動へどのような取り組みを行うとよいのかを反省を踏まえて進めていくためである。当然のことながら、このふりかえりで重要なポイントとなるのは、基礎的・汎用的能力を基本にして、キャリア教育の視点から活動をふりかえる点である。生徒会役員は、リーダーシップを発揮することも求められるが、それぞれの活動に対し協力して運営することは、自主的に取り組むことを通してキャリア形成と自己実現をめざした。

ゲストが入るクラスでは、学級活動の中で学校生活および学級生活を、C 中学校生徒とともに楽しく過ごせるための課題を見つけ、協力して問題解決をしていくことである。生徒は自分から進んでゲストへ声をかけたり触れ合ったりして、学校生活や人間関係をより良くしていくような態度をとった。この場合、生徒は自己理解を深めていくことになる。どのような場合なら、行動に移せるのか移せないのか。自分自身を知ることによって、学級においての生活をふりかえる中で、自分自身を把握していくことが可能になる。その繰り返しは、自分自身の良さや興味関心など、多面的・多角的に自己理解を深めていくことになる。隔年でC 中学校が来校するわけなので、ゲストが入った学級での体験は普段の日常生活とは異なるため、この機会を自主的・実践的に取り組むことを通して、一人一人のキャリア形成と自己実現を育成するには、願ってもない活動になった。

ホストファミリーは、日本の生活をゲストに体験させるために、人間関係を円滑に進め、日本文化に触れてもらえるように、コミュニケーションが取れるような工夫をした。国際交流は、双方にとって相互理解を深め、意思の疎通ができるような人を育成することにもつながる。ゲストと常にふれあうことは、生徒自身の将来の社会的・職業的自立に向けても、目的意識をもって学べる良い機会になった。特に、自己と他者の個性を尊重する面では、人間関係を円滑に進めるために、ゲスト自身も学ぶ点が多いはずである。休日は、それぞれのホストファミリーが、地域へ出かける機会を設け、日本文化や伝統を体験する中で、日本への理解を少しでも深めてもらい、日本の文化や伝統について関心をもたせることは重要であった。また、ホストファミリーでのゲストとの生活については、ふりかえりでまとめて学級内で成果の報告を行うことは、学級全体が

異なる文化や価値観をもつことにつながり、相互理解の重要性にも目を向けることになった。積極的な活動へ参加する姿勢は、学校行事ならではの活動であったと言える。

5. まとめ

本稿では、キャリア教育の視点から特別活動の充実を果たす点について一考した。一人一人のキャリア形成と自己実現については、児童生徒が意思決定を行うことになり、どのように行動が変容したのかが重要になってくる。キャリア教育の視点では、小・中・高等学校のつながりが明確になるようにし、キャリア教育にかかわるさまざまな活動に関して、学校だけではなく、家庭や地域における学習や生活への意欲につなげること、さらに将来の生き方を考えていけるようにする活動が特別活動の役割である。当然のことながら、学校教育目標をもとにして、各学校の実態に即した内容を進めていくことになるが、キャリア教育がめざす社会的・職業的自立に向けて基盤となる能力や態度の育成には、特別活動の特質を生かすことがより、9年間のキャリア教育の充実を図るためにも、基礎的・汎用的能力の育成につながる事が明らかになった。

キャリア教育という用語が登場した頃は、中学校のキャリア教育について職場体験学習だけがキャリア教育であるかのように解釈されている時期もあった(前述)。中学校のキャリア教育の中心である職場体験活動は、各事業所で労働を体験するだけでなく、事前学習や事後発表会などで社会的職業的自立に結びつく活動が組まれている。キャリア教育の中心的活動であるこの職場体験活動の意義や問題点を整理することから、特別活動におけるキャリア教育でのキャリア活動という視点を、今後は考えてみたいものである。

将来、厳しい時代のなかで、児童生徒一人一人が社会の一員として、夢や希望を持って自己実現できるための力を育てるという意図をもって、キャリア教育の視点で特別活動を捉えていく教育は、始まったばかりと言える。また、特別活動を要としつつも、他の教科等で進めていくことが、どのように結び付くのか等は、まだ漠然としている。

小・中・高等学校を見通し、キャリア教育の充実を図るためには、学校間の連携や教員の意識改革などがある。それぞれの課題は各学校や各学級によって違うが、児童生徒に対しての一人一人のキャリア形成と自己実現を図ろうとする教育活動は、特別活動を中心に実施状況に基づく改善などを通して実現を図りたいものである。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」p.58
- 2) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)第1章 総則」、「中学校学習指導要領(平成29年告示)第1章 総則」
- 3) 文部科学省(2018)「小・中学校学習指導要領 Q&A(平成30年)」
- 4) 前掲 「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編」p.9

- 5) 愛知県教育委員会 (2019)「平成 31 年度 幼稚園・小学校・中学校 教員研修の手引」『愛知県教育振興会』p.97
- 6) 鈴木英夫 (2018)「子どもの社会的自立を支える特別活動 —神奈川中学校でのキャリア教育を通して考える—」『神奈川大学心理・教育研究論集』第 43 号 神奈川大学教職課程研究室 pp.21-35
- 7) 長谷川誠 (2015)「中学校・高等学校のキャリア教育における『特別活動』の役割 —不安定化する社会で求められる『能力』形成に注目して—」『佛教大学教育学部学会紀要』第 14 号 佛教大学教育学部学会 pp.95-108
- 8) 前掲 鈴木
- 9) 前掲 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.24
- 10) 文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.40
- 11) 同上 pp.44-45
- 12) 同上 p.60
- 13) 同上 p.58
- 14) 同上 p.92
- 15) 同上 pp.94-95
- 16) 同上 p.94
- 17) 愛知県教育委員会義務教育課 (2011)「平成 31 年度 幼稚園・小学校・中学校 教員研修の手引」愛知県振興会 p.97
- 18) 愛知県教育委員会義務教育課 (2011)「小中学校 9 年間を見通したキャリア教育」愛知県義務教育問題研究協議会 pp.4-5
- 19) 文部科学省 (2011)「小学校キャリア教育の手引き<改訂版>」p.14
- 20) 二川正治 (2018)「特別活動を要とするキャリア教育におけるカリキュラム・マネジメントの視点」『東京家政大学教員養成教育推進室年報』第 5 号 1 巻 東京家政大学教員養成教育推進室 pp.227-236
- 21) 前掲 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.45
- 22) 高橋克己 (2019)「特別活動におけるキャリア教育の取り扱いに関する考察 —学習指導要領の記述に基づいて—」『教育学部紀要』第 52 巻 別集号 文教大学 pp.205-209
- 23) 前掲 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.60
- 24) 前掲 「学習指導要領」
- 25) 西岡由郎 (2018)「小学校におけるキャリア教育の推進・充実を図る実践的方法についての研究 —基礎的・汎用的能力育成の観点に立った特別活動との連動—」『奈良佐保短期大学研究紀要』特別号 奈良佐保短期大学 pp.65-75
- 26) 前掲 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」pp.12-13
- 27) 前掲 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.60
- 28) 前掲 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編」p.127